宋代「談馬顔等国」の位置に関して

木村　宏

一

諸蕃志巻上　流求国条に「流求国当泉州之東舟行約五六日程……往售於三嶼旁有毗舍耶談馬顔等国」と、文章中毗舍耶は既に和田清博士により現在のフイリピン群島ビサヤ諸島内に根拠地を置く国家ではないかと考証されている。[1]

石田幹之助氏も和田博士の説を継がれ、毗舍耶即ちVisayaと比定され、[2]其間、何等の疑義も有しておられない。尤も和田博士は流求国を現在の台湾と比定され、[3]文章の解読上、台湾より南行してバブヤン諸島、ルソン島付近にまでビサヤ族が活躍していたのではないかと附記されている。一方Hirth氏を始め、[4]近時には梁嘉彬氏等[5]により宋代の毗舍耶はフイリピン群島内ではなく台湾付近に比定せんと試みられている。毗舍耶をめぐる位置上の説を大別すればここに二説考えられるわけだが、和田博士のビサヤ族の活躍を現在の台湾、更に流求付近にまで拡大すれば一致させることも困難ではない。かつて流求国には大小二国が考えられたので、仮に小流求国を台湾南西海中の一小島と比定すれば、大流求国は台湾本島か、或いは他の島に求められねばならぬ。

流求とは現今の福建、広東方面の言語より察すれば「ルグ」と発音されるが、[6]もし流求国中、ルソン島近傍或いは本島自身に上述の発音に近い土地があれば大流求国とはルソン島内に求めても不合理ではなく、更にそれに関連した毗舍耶の根拠地がビサヤ諸島内に求められても不都合ではなかろう。諸蕃志巻上中に「泉州之東」とあるが、磁石を航海に利用するまで中国人は往々東と南とを混同しており、[7]たとい東方と記しても東南方の場合が多く、泉州を出帆して北西季節風を利用して東方に航すれば彭湖島に達し、更に進めば当然台湾南西端、バブヤン諸島、ルソン島北岸付近に到達するはずで流求国に大小二国あることと考え合せ、[8]大流求即ちルソンと解しても不合理とは断定出来ない。仮に大流求なる地名知識が回教商人から中国人に伝わつたとしても、また中国人が実際に流求国へ往つた

ものと考えても、ルソン島北岸よりアッパリを経てカガヤン川を臨み、更に溪谷内のイフガオ族により作られた階段耕作状況を見れば台湾島に比して如何に大なるか自ら判明するであろう。

以上より考察すれば毗舍耶の位置が次第に明確になつてくる。毗舍耶が多少の位置のずれがあるにせよ、ビサヤ諸島近辺に求められることは不合理ではなく、文中次に記されている談馬顔等国がやはりその付近に見出されねばならぬであろう。

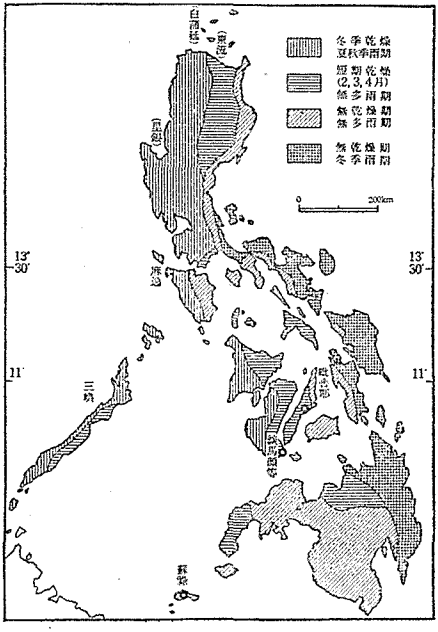
中国語(広東語)で談馬顔等国とは発音上から云えばタヌ・マー・ガン・テイエンとなるが、当時、福建の方言でどのように発音したかは明確には云えぬ。ただ音韻のみで考えればビサヤ諸島南部からミンダナオ島にかけて比較的多く散見する。例えば

Tumbagaan Isl. (Sulu) Tumbao (-u) Vill. (Cotabato N. W.) Tumatangas mt. (Sulu) Tumbaga Pt. (Mindoro), Tumalung B. (Zamboanga), Tambatan (Zamboanga), Dumaran (Palawan), Dinagat (Surigao), Tinambacan (Samar), Dumangas (Iloilo), Tacloben (Leyte), Dapitan (Zamboanga), Dumagette (Negros)

等があげられる。

毗舍耶をビサヤ海付近の島々に根拠地を置く種族国家と考え、当時の航路及びミンダナオ島北岸の要港ブツアンとの関係を考慮にいれると、その地域的中心部はセブ島(東西洋考中における宿霧国)[9]付近に求められる。更に「旁有毗舍耶談馬顔等国」との文より推して談馬顔等国がその付近に求められねばなるまい。

蘇禄がスール諸島内、西領後はモロ族と呼ばれる種族の国家であることは既に比較的明確に比定されている[10]ので、ビサヤとの中間を想定すればサンボアンガ半島の海岸線に沿つた付近、ネグロス島、セブ島、ボホル島の南部付近であろう。サンボアンガ北端にはDapitanがあり、ミンダナオ島北岸の金鉱採掘地たるブツアンとスール諸島との連絡上、寄港せねばならぬ地点である。ただDapitan



は明代初期既に喃嘩嘽として知られ、先学の士により殆んど疑義を含む余地なきまでに確定されている。

以上の諸点を考慮に容れればネグロス島東南端 Dumaguette が最も諸条件に適合しているように思われる（附図参照）。

二

東西洋考によれば東洋針路とは泉州より彭湖、台湾を経て麻里噜、馮嘉施蘭、呂宋、麻逸、合貓里国、毗舎耶、（談馬顔等）、蘇禄の順になつている。ただこの場合、東西洋考　巻九　舟師考中の地名より類推して宋代当時の地名に当てはめて考えたわけである。

宮良当壮博士によれば隋書の流求は台湾に相違ないと述べられている。[11] 巻八十一の流求国伝で大業三年（AD六〇七年）隋使朱寛と何蠻とが流求に行つたとあるが、和田博士によれば義安は汕頭の沖にある今の南澳島と比定され、[12] 勿鹿嶼は彭湖島に比定されている。東行二日の行程は彭湖島に達するのに義安から出立した兵士が汕頭の辺から出帆して二日で彭湖島に着き、更に水行一日にして往き着いたのが流求であるとすれば、時間的距離より推して台湾島の西南部、台南付近に到着したに相違ない。航行が北西季節風を利用しての場合を考えれば、彭湖島の位置との関係から台南以北に求めるのはかえつて不合理なことである。現在、台湾の南西岸にある東港付近に流求島嶼があるが、これは台湾がかつての流求と呼称されていたことを想起させ、台湾全体が小流求であつたことをも推察させる。小流求の位置が台湾の南端近くに位していることから考えてもその南のバブヤン諸島との交渉、即ちヤミ族の移動、[13] ビサヤ族の交易目的上の北進等を考慮に容れれば三嶼がバブヤン諸島に近くにまで、また毗舎耶がビサヤ族の建設した国でルソン島付近、台湾近くまで航行して中国船に接触していたことは否定出来ない。鹿野忠雄氏によればビサヤ族の根拠地はビサヤ諸島中でもミンダナオ島北岸に近いセブに求めても不合理とは考えられず、[14] 談馬顔等国がその付近としてネグロス島 Dumaguette に比定されることはさして困難ではない。対岸サンボアンガ半島と船舶の航行上、海峡をなして一関所の観を呈し、対岸港市ダピタンとの交渉もあり、更に南進して蘇禄より文萊と回教商人の活躍した圏内に入つている。そしてその先端は所謂、西洋諸国に入るから、中国と古来、最も交渉の頻繁に行われた国々に達せられる。

三

宋代における回教商人の活躍を調べるに、先ず、傅統先著、中国回教史中、第三章宋代の回教篇において海上交通の繁盛を述べ、九八七年頃、中国に入荷された物品が記録されている。[15] 中には黄蠟、

椰心算、その他、群島に関係する物も少くない。また諸蕃志、島夷志略等に見られる南海の東洋諸国中、中国に持参した物品中に多く島嶼の産物のみ見られ、中国よりもたらされた物品は殆んど記してない。恐らく中国船が直接彼地へ行つて交易するよりもむしろ彼地より交易にやつて来て、途中、仲継地で交易するか、或いは直接中国へ持つて来たのであろう。中国と彼地との中間にまた先述の回教商人の活躍を考えねばならず、ここに交易が単なる二者間で行われたのみと考えるのは早計である。

回教商人が中国より磁石の知識を得、羅針盤を作成したことは中国回教史中にも記されているが、[16] この利用が回教商人をして沿岸航行より横断航行に進転させる動機となつた。従つて、かつて沿岸もしくは島嶼づたいの航行の結果、海賊その他による被害も少くなく、交易上の不利も免かれなかつたが、横断による直接交易の結果、その取扱う物品の量、質及び利潤等に飛躍的な増大を認めねばなるまい。拙稿、「ルソン島とミンダナオ島比較研究(2)」中にミンダナオ島内の回教徒によるブツアンの開発を述べたが、就中その地域における奴隷制に関してはF. C. Cole, Saleeby, B. Lasker等による諸説をかかげ、[17] 回教徒による金鉱の採掘、甘蔗プランテーションの設置等に若干ふれた。群島の開発が種々の種族によつたことは今更云うまでもないが、ルソン島を中心とするタガログ、イロカノ、イフガオ諸族による開発、ビサヤ諸島内、特にセブ、ネグロス、パナイ諸島に根拠地を持つビサヤ族の開発、ミンダナオ島及びスールー諸島を中心とするモロ族の開発に大きく区劃することも困難ではない。ミンダナオ島のモロ族、中でもスールー諸島、ホロ島を中心とする回教化された種族はその開発にも他種族とは異り、奴隷を農園に使用し、甘蔗栽培、金鉱採掘にまで及んだ。[18] そこにルソン島における他種族タガログ、イロカノ、イフガオ等の水田耕作その他村落協同体に基づく農業経営とは異つた面を幾らか有しているわけである。前者が漁撈を主とする交易種族であるに比し、他方は農耕を主とする種族である関係から来るものか。モロ族は余り農耕には熟達していない。又、他方ミンダナオの諸種族はマノボ、スバノン、テイルレイ、その他焼畑耕作を行うのみで、[19] 稲の栽培はむしろビサヤ諸島から移住して来たビサヤ族によつている。当時、ビサヤ族が深耕文化に達していたかどうか、むしろ文化の特質は漁猟をともなつた耨耕文化に近いものではなかつたかと思わせる。[20] 尚、交易をもかねていたのであり、その定着性、また移住性、交易性には群島の諸族中、最も注目されねばならない。和田清博士が毗舎耶の活躍を広く解せられ、台湾はもとより、今の琉球付近にまで延長されたのも故なしとしない。[21] そこにビサヤ族の一部が航海にも熟している点、農耕にも卓越していることは西領初期にも狭い耕地の利用度が群島中でも

深しく高度であつたことを見ても明らかであろう。

談馬顔等国にもし種族を決定するならばビサヤ族による国家とみるも不合理ではあるまい。また麻逸国(附図参照)、呂宋国その他の諸国がタガログ族か、ビサヤ族か、その混合か、明確なことは分らぬが、中国の船舶と交易に当つたものにビサヤ族が少くなかつたことは想像に難くない。一六世紀初、スペイン人が当時の宿霧国と称せられたセブ(Zubu)に上陸した頃、既に中国のジャンク船を多く認め、また宣教師の報告によれば其後もしばしばビサヤ諸島付近で中国船と衝突している。またポルトガルもしばしば中国史書ではスペインと混同視され、同じく仏郎機と呼ばれているが、両国間の船舶も、往々、ミンダナオ北岸とビサヤ諸島南辺との海峡付近で接触していることも報告されている。[23] またスペイン人が最も恐れたいわゆるムーア（モロ）族との交戦もサンボアンガ半島北岸からネグロス島南岸セブ島付近にわたつて何度も行われているので、結局、ブツアン付近の金鉱、その採掘に必要とする奴隷の輸入、甘蔗の栽培拡張による製品の積出等に、中国をはじめ、モロ、ポルトガル、後にはスペイン、その他インド各商人が回教商人と共に集合し、群島中、最も活況を呈した航路の交叉点に当つたと云えよう。

四

談馬顔等国と音韻の類似する国として旧唐書巻一九七に記された墮和羅国及び諸蕃志に記された単馬令国等との関係を調べてみよう。

山本達郎氏によれば墮和羅国はビルマ、タイの国境付近、モン族の建設した国と比定され、メナム川流域を中心として栄えた[24]と記されている。氏はその中にあつたDvāravati国を漢訳したものではなかろうかと付記されている。尚、Dvāravati国は一三世紀頃まで存続し、新旧唐書は勿論、諸蕃志に記載されている三仏斉の属国としての単馬令国も同一国家と比定されている。また、Tāmbralinga も付近の国で諸蕃志の単馬令は此の国に他ならぬと、これは同じく諸蕃志中の流求国伝の談馬顔等国とは音韻は良く似ているが、これは「音をもつて漢訳に当つ」との同書の主旨より出たもので、音韻の類似のみをもつて同一国家と判定するのは危険である。

墮和羅国、単馬令国と談馬顔等国との間ではヒンズー文化の滲透程度では差が認められるが、インドシナ半島、マレー半島よりフイリピン群島に、スマトラ、ジャヴア、ボルネオ各島嶼をつたつて波及したのであるから、ここにヒンズー語系の地名が残存していても不合理ではない。談馬顔等国は明らかに毗舎耶に近接し、蘇禄国に臨む東ネグロス島南端に比定されるのは甚しい誤りとは云えないであろう。[25]

宋代の諸書が隋書流求国伝の記載以外に附加した個所はこの「旁

有毗舍耶談馬顔等国」の一〇字であることは既に和田清博士により指摘された。宋代、中でも大体一二世紀より一三世紀にかけてビサヤ族の海上における強制的交易が増大してきたことを物語るもので、ビサヤ族の国々は毗舍耶を始め、談馬顔等その他未だ明白に比定されていない南海の東洋諸国を含んでいるのではなかろうか。

毗舍耶は諸蕃志中では毗舍耶国とは記していない。談馬顔等の次には国と記してある。ここに「談馬顔」と「談馬顔等」と二通りに解されるわけだが、[49] 毗舍耶に関してはその次の項で毗舍耶と国名を附さずに記され、更に文中にも「毗舍耶語言不通、商販不及、祖裸盱睢、殆蛮類也……」と、未だ国と称するに及ばぬ程、未開な行為が認められたようで、「旁有毗舍耶、談馬顔等国」と「等」を談馬顔にのみ附する方が合理的と思われる。従来、談馬顔等国を談馬顔国とのみ読解し、伊能嘉矩氏は台湾東南方の紅頭嶼に比定され、島夷志略の校注者藤田豊八氏等はトバゴ島に各々比定された場合が多かつた。しかし、金関丈夫氏は前三者のトバゴ島及びその付近にのみ限定せず、イトバヤット島、或いは台湾、フイリピン群島との海峡付近の島々に以上の地名の分布の示すような範囲にわたつて棲息した南方系の耨耕民族、或いはその占居地を指したものではないかと極めて広く解しておられる。談馬顔とのみ読解するのみでなく談馬顔等国と一歩進めて解してこそ始めて地名の比定により堅実に進み得られるのである。

和田清博士は台湾の流求と呼ぶ名称について大小流求何れを台湾にするか、前述の如く明確には述べておられない。思うに池内宏氏の「文禄慶長の役」中、小流求を呂宋と比定されて[51]以来、小流求と大流求との問題は台湾とフイリピン群島との関係にまで進展して来た。Hirth, Rockhill 氏は諸蕃志麻逸国中の東流新を東ルソンと解せられ、和田清博士も同じく東流はルソン島北岸付近に位置を擬定されている（附図参照）。推察するに小流求こそ現在の台湾西南方の一小島に琉球なる名称を止める如く、台湾本島もしくは西方海面上の島嶼に求めらるべく、大流求とは東流、東流求とも解しても不可解ではなく、ルソン島北岸、乃至北岸付近の島嶼に求めても甚しい誤を生じるとは思われない。

仮に航海者より台湾本島、呂宋島両島の景観を観察すれば、既述の如くルソン島北岸アッパリ付近は当時既に水田耕作は勿論、他に比類無き階段耕作まで行われており、カガヤン川の水量、川幅、その流域の広大さ、及び沿岸住民の文化程度を察すれば大流求とは自らルソン島を指すことが分るであろう。

当時、中国人は小流求として台湾の西南端を知つていたが、原住民はむしろ直接交易には従事せず、フイリピン群島からのビサヤ系種族により取引される場合が多かつたように思われる。そこに取引

上より、また交易の才から考えても台湾の他に更に大なる流求国を想定したことは考えられ、ルソン島の事情が明確になるにつれ、更に遠距離の現在の琉球諸島を大流求と呼称するようになつたのであろう。

一方、台湾の内部事情が次第に中国人の間で明確になるにつれ、台湾の大いさが分り、それに反して呂宋へは、中国人中、直接交易に行つている者が少なかつたので、かえつて台湾を大流求と思うようになつた場合も考えられる。しかも、それにつれて小流求はバビヤン諸島、或いは台湾西南小島と種々位置を変えて名付けられたわけであろう。現在、台湾西南の一小島が琉球嶼と名付けられているのを見てもその一端を伺い知ることが出来る。

大小流求に関する欧人の所伝は勿論、中国人の見解をおそつたものだが、一六二二年、オランダの総監 Coen の報告[28]には台湾を小流求と云い、一六七〇年の O. Dapper 及び一七二四年の F. Valentijn の所伝にはかえつて大流求と云つているのを見ても前述の点から想像されよう。ともあれ、大小流求の位置の確定が延いては三嶼、毗舎耶、談馬顔等国の位置決定に重要な役割を演じているのであり、何れかの見解に基いてより精緻な考証に進めるべきであろう。

五

談馬顔等国は交通上からみても、また種族上から考えても現在の比定された地点付近を著しく変更することは不可能であろう。他の単馬令国、投馬（和）国、堕和羅国とは位置上全く異ることを指摘しておきたい。しかし、ヒンズー語系の地名から推してヒンズー文化の伝わつた頃栄えたものか、今後尚研究の余地を残している。

最後に定住生活を基にして国家の成立を考えれば自然環境上からの因子を見逃してはならない。

フイリピン群島を襲う颱風は北緯八度より一一度付近までの区域に回数としては最も多い。しかし、破壊的颱風はむしろ北緯一一度より一三度三〇分までの地域に最も甚しい。[29]従つて種族国家の根拠地としては群島東辺よりも西辺、また北緯一三度三〇分以北か、一一度以南に求めらるべきであろう（附図参照）。尤もミンドロ島、ルソン島北部、南西部には東辺、太平洋岸に近接する火山脈、山系等により、颱風の害を或程度免かれるが、その他の諸島においては防禦は不可能である。従つてビサヤ（毗舎耶）、呂宋、麻逸、談馬顔等、蘇禄諸国が何れも風下の位置に国家的形成に資する地域中心を置かねばならぬと考える。次に雨量に関しても、[30]フイリピン群島東辺の無乾燥期、冬季雨期の地域及び無乾燥期、無多雨期の地域を除き、群島西辺の短期乾燥期（二・三・四ヶ月）、無多雨期の地域及び冬季乾燥、夏秋季雨期の地域を中心に求める率も大になるわけ

である。

麻逸、毗舎耶、談馬顔等、蘇禄諸種族国家の中心地域を以上の点より綜合して考えると、自ら、一定の区域に限定される(附図参照)ことを余義なくされる。談馬顔等国の位置がビサヤ諸島中、最南端のネグロス島東南部付近に比定されることは自然環境上から考えても、それ程、不合理な位置と断定することは出来ないであろう。

註

① 和田清著　明代以前の支那人に知られたるフィリピン諸島　東亜史論叢　昭和一八年　五一四―五一八頁

② 石田幹之助著　南海に関する支那史料　昭和二十年　一七六―一七七頁。

③ 和田清著　前掲書　五一四頁。その他、同氏著、「琉球、台湾の名称について」東洋学報　一四巻四号「再び隋書の流求国について」歴史地理　五七巻三号　二二四―二二六頁。

④ Hirth, Rockhill: Chau Ju-Kua. 1911. p. 165-166 〔His work on the Chinese and Arab Trade in the Twelfth and Thirteenth Centuries, entitled.〕には毗舎耶を台湾の蕃族中に求め、恐らくフィリピン群島より渡来して来た種族であろうが、台湾に永住し、ビサヤは台北の Pazehhe 部落ではないかと論及している。

⑤ 梁嘉彬、「宋代『毗舎耶』確在台湾非在菲律賓考」文献専刊二巻三・四号　民国四〇年

⑥ 福建省各地の中国語には方言が多く、又、広東の方面中国語と発音その他に相違が見られるので、現在台湾在住の中国人の発音を調べれば、福建各地の方言をも合せ知ることが出来、かへつて当時の発音に近いものが得られる。従つて此の場合、日台辞典（台湾警察協会発行、昭和六年）を使用しその発音を調べた。

⑦ 梁嘉彬　前掲書　中国人が往々、東と南とを混同していることを指摘している

⑧ 和田清著「琉球、台湾の名称について」東洋学報一四巻四号　同　「再び隋書の流求国について」歴史地理五七巻三号　二二四―二二八頁

⑨ 東西洋考巻五、呂宋伝の中に「朔霧、俗名宿霧仏郎機未拠呂宋時先聚彼中与其国人相親好、仏郎機之破呂宋、朔霧人有力焉、(後略)」西領初期セブは Sibu〔Zubu〕と呼び群島支配の最初の根拠地としたが、セブは即ち朔霧、宿霧であることは右文中より推して明らかである。

⑩ 藤田豊八著　島夷志略校注(全)(国学文庫第二六編)八一頁

⑪ 宮良当壮著「琉球民族とその言語」民族学研究一八巻四号

⑫ 和田清著「琉球、台湾の名称について」東洋学報一四巻四号

⑬ ヤミ族の移動に関しては　宮良当壮著　前掲書参照。

⑭ 鹿野忠雄著　東南亜細亜民族学先史学研究　金文化の北進について述べる。七―八頁。

⑮ 傅統先著　中国回教史　宋代之回教篇及び回教対於宋代文化上之影響篇参照。

⑯ 傅統先著　前掲書　三九―四〇頁及び Hirth: The Ancient History of China 中に「磁針を発見した中国人は羅針盤の製

作にまでは及ばなかつた……アラビヤ人の製作により始めて航海に使用されることになつた」と。

⑰ F. C. Cole によれば「フィリピン群島南部の奴隷制はヒンズー、ジャヴァ人と征服者によつてもたらされ、後、回教徒の侵略者によつて伝播された……」と、

また、M. M. Saleeby によれば「この附近の奴隷制に関し、回教徒の習慣上、奴隷の個人的所有という単なる組織であつたというよりはむしろ封建的、半軍事的な要素を多分に含んだ。つまり異人種であるスルタンの独裁的役割を果す上に、全住民の服従を強いるに必須なるものであつた……」との意見を有している。また、B. Lasker も「スールー諸島の回教徒と同じくダトウにはアラビア人の血統の者が相続し、奴隷制も続けられた」と、「従つて奴隷による農園は永く続けられ、同時に権威を持続するため、益々、奴隷制は行われた」と、以上、多くの研究者によりこの地方の回教徒と奴隷の関係について意見が発表されている。

B. Lasker: Human Bandage in Southeast Asia. p. 39-41
M. M. Saleeby: (B. Lasker: ibid, p. 39 所収)
F. C. Cole: (B. Lasker: ibid, p. 36 所収)

⑱ A. L. Kroeber: People of the Philippines, 1919. p. 79-84

⑲ Cainguinin〔Kaingin〕と称する一種の焼畑耕作を行う。
A. L. Kroeber: ibid, p. 26, 81

⑳ 金関丈夫「諸蕃志の談馬顔国」と題して発表された第七回人類学民族学協会大会記事中に詳記。

㉑ 和田清著　明代以前の支那人に知られたるフィリピン諸島東亜史論叢　五一七頁。

㉒ Blair and Robertson: The Philippine Islands. p. 75-77

㉓ Blair and Robertson: ibid. p. 113, p. 168.

㉔ 山本達郎著　暹和羅国考　史林二四巻四号　一三—一四頁

㉕ ヒンズー文化の東漸に関しては
G. Coedès: Histoire ancienne des Etats hindouisés d'Extrême-Orient. Hanoi. 1944.〔pp. VIII-361. 2 Tableaux généalogiques, 5 cartes géographiques.〕セデス「極東の印度化した諸国の古代史」山本達郎紹介　東洋学報三一巻三号
氏はインド人の移住発展を商業的性質のものとなし、特に東方に金を求める意図の多かつたことを重視している。

㉖ 談馬顔国と読解して古くは伊能嘉矩氏は台湾南方の紅頭嶼に比定された。次いで藤田豊八氏は島夷志略校注三島篇において談馬顔と読解され答陪と同じく台湾南方の Tobago に比定されたが、後、Hirth, Rockhill 氏も同じく同地点に比定された。しかし、鳥居龍蔵氏によりその誤を指摘されている。鳥居龍蔵著　紅豆嶼地名考　東洋学芸雑誌第一七五号

㉗ 池内宏著　文禄慶長の役、正編一の八〇。

㉘ 和田清著「琉球、台湾の名称について」東洋学報一四巻　五七三頁所収

㉙ Census of the Philippines. 1918., 1939.

㉚ Census of the Philippines. 1918., 1939.

（附記）本論は昭和三十一年度史学研究会四月例会において発表したものを基としている。